

先輩に聞く

殻を破る

ゴリラ研究の第一人者、山極寿一・京都大学学長(64)は野生のゴリラやサルに飛び込んで研究する行動派の学者だ。高校・大学時代に生き方や学び方に悩みもがきながら、霊長類の調査にやりがいを見いだして自分の殻を破った。

少年時代にロビンソン・クルーソーや十五少年漂流記など冒険小説を愛読し、探検家に憧れた。遠い無人島や宇宙に興味を持った。高校時代に学生運動が激しくなり、現実社会の不可解さや風潮に流される人間の不思議さに関心が移った。

高校3年生だった1969年度は日米安全保障条約延長に反対する学生運動がピークを迎えた。通っていた東京都立国立高校でも紛争が起り、授業妨害やストライキが頻発した。同級生たちは「社会とは?」「人間とは?」と毎日議論していたが、私は違和感を覚えた。彼らの発言は社会主義者のマルクスやエンゲルスの書物の受け売りで、ベダンティスト(学者かぶれ)に見えたのだ。「それは本当に自分の意見なのか」と疑問に思った。学生運動の限界を知った私は東京を離れて環境を交え、どう生きていこうか見つめ直したいと考えた。「自由の学風」をう

ゴリラ研究探検心で熱中

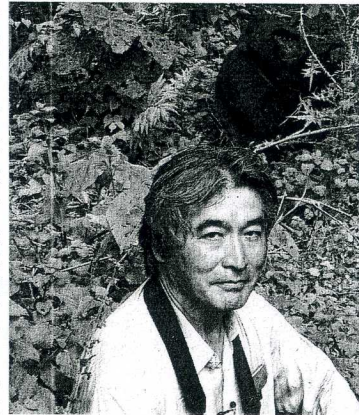
たう京大に魅力を感じて受験し、合格した。物理や数学が得意で理学部に入ったが、人類学に興味を抱く

京大に入学した70年以降も学生運動の風はやまなかった。スキー部に入り、冬山のサルを観察した時のことだ。大学紛争で目つきが変わったり自己矛盾に陥ったりする学生たちの顔が、サルの顔と二重写しに浮かんだ。サルより進化したはずの人間がなぜいつも苦悩し、言い争ったり暴力をふるったりするのか。人の人たる所以(ゆえん)を霊長類との比較で研究することに決めた。

人の言葉借りず、自ら体験

山極寿一さんはこんな人

- 学生から教授時代まで通算で約15年、アフリカのジャングルでゴリラを調査した
- 専攻は人類進化学。社会性やコミュニケーション手法がゴリラとの共通祖先からどう進化したかを研究した
- ゴリラと人類が分岐する過程で家族の単位がどのように生じたかについて、食事や生活史から分析した
- 趣味はアフリカの音楽を聴きながら踊ること。山菜を採取して料理を作り、酒を飲むこと



研究室で、私は半ば強迫して研究発表をすると、教員や先輩から「フロイトになる。人間の文化や社会の進化について、精神分析学者のフロイトなど思想家たちの言葉を借り

京都大学学長

やまぎわ
じゅいち
山極寿一さん



研究者になるには

幅広く学び
考える力を

山極氏は京大の大学院入試に一度失敗した。大学を留年し2年目に合格した。「高校時代に暗記科目が嫌いで生物の勉強をしていなかったのが響いた」と振り返る。

就活の関連情報はこちらへ 18歳プラス面では就職活動中の大学生の疑問や不安にこたえる記事を掲載しています。関連情報を電子メールでget@n1.kei.co.jpへお送りください。

た。研究者になれなかったら新聞記者になりたかった。大学5年の時、複数の新聞社の入社試験を受け、科学記者として受けた。科学記者として生物の生態を追いかけるのも面白そうだと思っていた。「サルやゴリラを観察できれば職業は何でも良かった」とも話す。山極氏は「高校生や大学生が研究者の職に就きたいと思って科学を勉強するのなら、それは間違いだ」と語る。「新しい発見」(若田敏則)

無い」などと厳しい指導を受けた。これでは高校の同級生たちがマルクスやエンゲルスの受け売りをしていて、殻を破る発想や実体験をしなければならぬと焦った。大学院で屋久島のサルを調査した後、アフリカでゴリラを研究すると思った。研究者になつてから、アフリカのジャングルで島を北から南まで歩き回った。オリジナルの研究をするために誰も行ったことがない所に行こう、誰も見たことがないことを発見しようと思検心が警戒心を解き、群れに近ついた。凶暴ではなく、人間と心が通じ合う生物を送り、野生のサルを追いかけた。すばしっこく、威嚇をしてくるサルを調りらの群れに人間の家族査することは大変だった。が、徐々に生態が見えてがあることを確信した。

「コラム「先輩に聞く」は随時掲載します。」

きた。野生のサルは動物園のサルのように食物を騒々しく争奪し合うことはなく、集団で仲良く食事を取り秩序を保っていることが分かった。進化した初期の人類もこんな風に自然に溶け込んだ暮らしを送っていたのだろ